
Wanna be the HEROES!! **世界を救うだけの簡単なお仕事です**

小林銀座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wanna be the HEROES!! 世界を救うだけの簡単なお仕事です

【Nコード】

N8821X

【作者名】

小林銀座

【あらすじ】

魔王や勇者、恐ろしいですね？

黒魔術や呪いの類、魔法の毒、はやく治したいですね？

隣国の脅威に怯える生活はもう嫌だ？

はやく世界を平和にしたいけれど、資金や自国民に損害を与えたく

ない？

そんな色々な一世界・時空・星系宇宙（Somewhere）の
あなた（Just）一の（for）一為に（you）！

魔王討伐から必要アイテムの調達まで、どんな些細なことであつても、現役の勇者や英雄、聖女が自ら行います！

万が一アンデッドが復活しても大丈夫！ アフターケアも万全です！

料金も格安、等価値交換可で二百五十五回までの分割払いOK！

財政状況に応じてディスカウントいたします！

世界平定代行・千乱鎮圧・英雄派遣のヒーローズ・プロダクション

！！！！

今ならもなく、マスコット『ヒロポンくん』の限定版ストラップ
& p・キーホルダープレゼント！

アクセスはこちらの電話番号、魔方陣、もしくは軸座標にご連絡ください！！

だいたい今日びの主人公は悩みすぎ。

英雄ヒーローとは勇者ヒーローとは主人公ヒーローとはなんぞや？

かく語て。

汝は語り手なり。汝は主題の実行者なり。汝は越境する者なり。

汝は代弁者なり。汝は解決者なり。汝は才の持ち主なり。

汝、善人たれ。汝は自らの退場をもって物語を終えるものなり。

汝は汝の物語の個性を象徴する者なり。

いや、本当はそんなものじゃない。そんな自己犠牲の精神なんて持ち合わせなくてもいい。

利己的で、もっとワガママでもいいはずなんだ。

世界の半分を、高額な資金を、最高の女をくれてやると言われたら貰えばいい。

それから相手を殲滅したって、文句はないだろう？

悪役ヒールなんて、反対側ヒーローの正義の味方ってだけなんだ。

そうじゃないとしても、大義がないとしたって。悩まないで剣を振るってりゃいいんだよ。

その一！異世界の話の場合。

公王国歴三 六八年、帝歴五一七六年。

公王国八十六代公王、エレニアは王帝エルラ率いる崑崙に宣戦を布告した。

人魔平等条約によつて、長きにわたる先の大戦が平定されてから十余年。その傷跡も癒えきらぬままに起こされた戦火。

被害の大きかった公国側からの宣戦布告ということもあり、それは時を経ずに立ち消えるものと考えられていた。

そう、そのはずだった。

宣戦布告から二ヶ月。国境を西方涼域高原。その荒野に黒い男が立っていた。

「ははは、はあは、あはあは！ 剣ツノよお！ 戦場いくさばじゃ、まったくの戦場じゃ」

訛りの強い口調で笑う男。立ち込める砂埃を振り払い、黄金の剣を持って、眼前に居並ぶ軍団に向かって走りだした。

軍団は多種族で構成されていた。

勇敢で仁義に厚い種族であるオーク鬼の騎兵団がいた。

大きな目と、耳まで裂けた口を持つゴブリンの弓兵がいた。

ワイバーンも、スライムも、ドレイクも、そしてアンデッドも。

その数十万を優に超える、崑崙の主力兵団。

その軍勢の雄叫びだけで、戦場が揺れる。

象の突進を思わせる軍団の進撃と、千鳥足のようにも見える一人の男の疾走。

その二つが邂逅し、火を見るよりも明らかな結果が提示される。

軍団は一人の男に、否、一振りの剣によって駆逐されていた。

戦列が引き千切られる。

ある者は人と違う色の血を吹き出して倒れ、またある者は悪臭のする臓物を撒き散らし、またある者は胴体から上を細切れにされて。ある者は踏み潰され、ある者は首をはねられ、ある者は引き裂かれて。

一騎当軍。

黒い男。乾いた血糊が膠のように張り付いて、最早元の色彩を失ってしまった男。

そんな男に対して、返り血を浴び臓腑を引いちぎってなお、神々しさと黄金の輝きを失わない剣。

偽・聖剣アーガリバーとその使い手、勇者ハロルド。

その進行は、まるで出エジプトエグソダスの際に十戒を持ったペテン師が湖を割ったのと同じように、戦場を一直線に北へと目指していた。

いかなる武器も軍勢も畏も意に介さぬアーカリバーの威力。正しき担い手によって増幅されてか、その力は更に増していた。

「剣よお、たのしいなあ、たのしいな、剣よお」

『……』

「そうか、そうかあ、お前も楽しいかあ。やはり気が合うなあ、剣よお」

笑う笑う、勇者が笑う。人のよさそうな顔つきながら、その半月状の口元は人バケモノでなしのそれを思わせた。

「みろよ剣よお。鋼より硬い飛龍の鱗皮が、羅沙紙のようじゃあ」

地上に立ったまま、剣を振るう。

感慨も情緒も遠慮もなく、血みどろにまみれて、そこには遺骸の山が築かれた。

ハロルドの戦禍が巻き起こっているその最中。

崑崙の帝都、栄夏^{ロシカ}。温暖かつ乾燥気味な、砂漠の中のオアシスの街。そのほぼ中奥にそびえ立つ、王の居城。その広大な敷地の中の離宮の一つ、円龍宮の廊下を一人の執務官が足早に歩いてゆく。

彼女の目的は、その最も奥の一室。

乾季の今、通気性を重んじるこの街の建屋にしては珍しく、この部屋には芦布と竹で組まれた軟禁戸が立てられているその部屋だ。

その戸の木枠を軽く叩き、彼女　皇帝エルラ付きの執務官長補佐であるシュウイ　は中に声をかける。

「殿下、いらっしゃいますか？　陛下がお呼びです」

返事はない。たとえ寝ていても足跡を察知して起き上がるはずだ。あの腐れ第一皇子はここで強制学習しているはずだが、まさ抜け出たのだろうか？

戸を一気に引き開けると、そこはもぬけの殻。誰もいなかった。皇子の力量では開かないように方儀式を組んでいたはずなのだが……

「ぬかったか……あのクソ皇子め」

よく日焼けた色の眉間に、まだ十代だと思えないような深いシワを刻む。

彼女は上品な容姿に違わぬ才媛であるが、庶民出という出自故に基本的に口が悪い。そして手も早い。

彼女その鋭い眼光で、ジロリと部屋を見回す。非常に綺麗な室内。塵一つなく、書簡も筆も片付いている
それはつまり。気がつくと同時に彼女は踵を返す。

「ucci、全く何もせずに逃げやがったな……」

「私が逃げるわけなかるう。して、何ようか？」

「っ!？」

後ろから逆さまに小さな手が伸びて、彼女の平均より大きい胸部を揉みしだく。

シュウイは声の発せられる位置に向かって、張りにぶら下がった不届き者の顔面めがけて肘鉄を放つ。そう、彼女は手が早いのだ。
ごり、という鈍い音と鼻骨の感触が彼女の腕に伝わる。同時に、彼女の胸元に伸びていた小さな手の感触が消える。そして、落下音。

「し、シュウイ！ 貴様それは不敬罪だぞ？」

「やつかましいわこのセクハラ小僧が！」

「誰がセクハラ小僧だ行かず後家！」

「ハアッ！」

振り返ったそこには、現皇帝エルラの特徴をよく残した少年がいた。黒い髪と、それに対比されたかのような真っ白い肌。十五という年齢の割には幼い外見。王位継承者第一位の皇帝嫡子、ユーリ。

その顔に本日二発目の、裂帛に気合を込めた打撃が見舞われた。

「シュウイ、いつも言っておろう。^{アレ}ユーリも一応は皇子なのだから顔は止せと。打つなら胴体^{ボディ}だ。胴体。」

「は。申し訳ございません皇帝陛下。緊急事態でしたので」

「まあ、次から気をつけてくれれば良い」

「は。善処^{ぜんしよ}します」

「うむ。まあ、武器を使わない限りは構わ「母上、流石にそれはおかしくありませんか!？」」

居城である瑠樺^{ルカイアン}居庵だけではなく、栄夏^{ロンカ}自体の中心である謁見の間風通しを優先した開放的な空間に赤を基調としたカーテンと質のいい調度品が置かれている。中央を空けてオーク鬼の元帥やドレイクの参謀長、ゴブリンの執政補佐官が「臣下の礼」の姿勢で並んでいる。

そしてその中央に玉座。

そこに座り、物憂げに長い髪を弄る気怠げな女性とシュウイのやり取りに、たまらずユーリは口を挟んだ。

公王国と違い、ここでは一般市民でも皇帝が暇でさえあれば会える。そんな崑崙皇室のなかでも、彼女は異色の存在だ。

その気怠げな女性こそ、現崑崙皇帝エルラ。崑崙の最高権力者である。

シュウイと並べば十人が十人シュウイを年上だと思つような、ユーリと並べば1つ下2つ離れた姉だと思われかねない、そんな容姿。

二十年以上にわたって帝位に就きながら、いまだに玉璽^{ミカドノコロモ}である帝衣

に着……られている様な彼女。

見慣れていないものには、彼女が歴代皇帝の中でもトップクラスの能力を持つなどということは信じられないだろう。

「いや、お前が悪いだろうユーリ。お前ももう元服間近の男子なんだから自重しなさい」

「ぐっ……せ、正論は時に人の心を傷つけるものです、母上」

「お前の言動と行動は常に傷つけます。さて、不毛な愚息の話題は置いとくとして、本題に入ろうか。リグジ、地図。アドラ、駒」

「はづ。こちらに」

エルラの声に反応して、執政補佐官と元帥が立ち上がり地図と駒を用意する。

十二の赤い駒と九つの白い駒、そして一つの黒い駒が大陸地図の上に置かれていた。

それを前にして、オーク鬼の將軍アドラが口を開く。

「ではバ……皇子でもわかるように、掻い摘んで説明いたします」

「おい、今バカって言いかけただろう」

「大体の状況はお分かりと存じ上げますが、ご覧下さい」

「無視か、無視なのかおい」

「ユーリうるさい」

「母上エ！？」

「位置は大凡にですが、赤が方の戦力、白がエレミアの戦力になります。双方とも駒一つで約十万の軍団だとお考えください」

西方高原と栄夏を含む天弦砂漠。その外縁を百里森林が覆う。

そこから国境を含む西方涼域高原都との間には、標高一万メートル

級の天山山脈がそびえている。その山間には唯一の交通路である大狭門峠。

そして地図上では高原側に三つ、森林側に七つ、そして峠の関所に二つ赤い駒が並んでいた。

対して白い駒は九つ全てが一直線に、公王国と前線を結ぶように並んでいる。黒い駒を先頭として。

「敵の陣形は補給路確保の陣形ですので、これを崩すのは難しいものではありません。ですが問題は」

黒い駒を指さして、執政補佐官が言葉を引き継ぐ。オーク鬼の地を這うような低い声から老齡のゴブリン特有の甲高い声にいきなり変わって、ユーリは不快感に顔をしかめた。

「この黒い駒。すなわち『勇者』と呼ばれる此奴です」

ゴブリンのリグジ翁が、長い爪で黒い駒を指す。不愉快そうに顔をしかめているのだろうが、もとより深いシワが刻まれているその顔に変化があったようには見えない。

「公王国の切り札であることは間違いない此奴は、その突破力だけでも我が方の騎竜特使団以上でしょう。戦闘力に至っては一軍団以上かと。つまり」

「このままだとなんとか抑えられている大挾門峠の陥落も間近。そうなるとすぐにでも栄夏（ニホ）にも手が及ぶ」

「「その通りです。バカ皇子」」

「あれ？ 私今いい読みしたよね？」

執政補佐官と元帥から注がれる視線の意図を読み取って、ユーリが言葉をつなぐ。期待に応えられるような答えは出せたはずなのだが……まさか見逃した点があったのだろうか。確かにユーリにこの話を聞かせた点や、シュウイまで列席しているという点は気になるが「すみません殿下。つい癖で」
「ふむ、普段から使っている呼称ですゆえ、つつい出てしまったようですな。はっはっは」

すまなそうなオーク鬼軍人と、笑って答える老ゴブリン。この二人いつか皇室不敬罪でしょっぴいてやる。

「まあそれはともかくとして。陛下、なぜこの事を殿下に？」
「それはともかくなんだ、皇室不敬罪並みの発言なのに」

リグジ翁が皇帝に問う。確かにそうだ。今日まで曖昧な情報しか与えられていなかったユーリにこれだけのことを教えるということは、何かしらの系あつてのことなのだろう。

「ああ、うん。ユーリにやってもらいたいことがあってね」

「い、行けませんぞ陛下！ 殿……失礼。バカ皇子のことです。御身に何かあった場合、直径の皇位継承者がいなくなりますし、それ以上に何かしらの被害を起こされるかもわかりません」

「リグジ殿の言うとおりです陛下！ もしまた新兵を率いて歓楽街に繰り出されだしたら！」

二人が口々にユーリの行動を拒む。減衰の口にしたことは事実であるが、おいまして執政補佐官。言い直すな。あと被害のほうがユーリの安全より上だと言うか。

「ああ違う違う。そういうのじゃなくて、単純なお使いだよ。軍勢を率いよ、とか勇者と戦えとか命ずる気はない」

皇帝の一声に、安堵する二人のため息が漏れる。
だが次の一言で、その評定のまま二人は凍りつくこととなった。

「ただ、『勇者』に対抗するための『英雄様』を探してきて欲しいだけ。期限は一月。私自ら前線でアイツを足止めしておくから、よろしくね？」

皇帝は笑顔で、一枚のチラシを取り出した。

魔王や勇者、恐ろしいですよね？

黒魔術や呪いの類、魔法の毒、はやく治したいですよね？

隣国の脅威に怯える生活はもう嫌だ？

はやく世界を平和にしたいけれど、資金や自国民に損害を与えたくない？

そんな色々な一世界・時空・星系宇宙（Somewhere）の
あなた（Just）一の（for）一為に（you）！

魔王討伐から必要アイテムの調達まで、どんな些細なことであつても、現役の勇者や英雄、聖女が自ら行います！

万が一アンデッドが復活しても大丈夫！ アフターケアも万全です！

料金も格安、等価値交換可で二百五十五回までの分割払いOK！

財政状況に応じてディスカウントいたします！

世界平定代行・千乱鎮圧・英雄派遣のヒーローズ・プロダクション
！！！！

今ならもれなく、マスコット『ヒロポンくん』の限定版ストラップ
& amp・キーホルダープレゼント！

アクセスはこちらの電話番号、魔方陣、もしくは軸座標にご連絡ください！！

「で、ココに行けと？」

「そ。そこに行って、契約してきて」

皇帝から差し出されるチラシを受け取る皇子。ちゃんと両手で受け取るあたりは皇子らしいと言える皇子らしい。バカ皇子なのだが。

「？」

製紙技術は水と植物の多い所で栄えるものだ。首都を『水の都』とまで言われる都市エルトリウムに置く公王国ならいざ知らず。紙といえは未だに分厚い羊皮紙が書きにくい事この上ない竜髪紙、もしくは品薄も加わって超高価な公王国からの輸入品ぐらいのものだ。その輸入品もこのチラシよろしく滑らかでシミひとつ無いものじゃない。それにこのインクも、文字も、この世界にはない技術だ。

まさか本当に異世界？

「で、どうやって行けと？ 駱駝車でも出してもらえますか？」

「いや？ その魔方陣に触「これですか？」あ、それ不用意に触

れると」

「?」

ギリギリギリリッ!

赤い絨毯に、ねじ切るような音とは裏腹にシミを作るように、黒い穴が開く。半径、約肩幅。見通すことの出来ない黒が広がる。

「え?」

ユーリは、一瞬の浮遊感を全身に感じる。そういうものを感じるということは、すなわち

「だあああああああああ!」

落下。本来なら大理石のしかれているハズの空間に、自由落下以上の何か引つ張られるような勢いで落ちていく。なんの抵抗もなく。腰まで底に吸い込まれたあたりで、ユーリの生存本能が警鐘を鳴らして行動に移る。

つまりは、溺れる者は藁をも掴む。よって溺れる皇子は

「なっ!? は、離しなさいバカ皇子! 死ぬのはあなた一人で十分です!」

「シユウイ貴ツ様あ! というか、死ぬの? あと死ぬというのか皇族にいいい!」

「大丈夫です、貴方が死んでも代わりはいるもの」

「いねえよ!? 間違いないねえよ!」

「いないよ、多分?」

「疑問符付けんな母上エエエ!!!」

配下をつかむ。必死に手を回して、シュウイの腰のあたりにすがりつく。

死にかけながら彼女の尻に頬を擦りつけるあたり、やはりバカ皇子。根性はあるようだが……

そのシュウイの必死な抵抗を、皇帝の一押しが無に帰す。

「陛下デメエエエ！」

「じゃあ、行つてらっしゃい。あ、勇者は御統真澄^{みすまるとみ}つて人を指名してね」

「母上、それ以上に言うことがあるでし」

吸い込まれる息子と配下に掛ける口調じゃない、明るい感じの声。それに何かを言おうとして、言い切る前に穴は閉じてしまった。穴のあった位置に、ふらふらとチラシが落ちてきた。皇帝はそれを拾い上げる。

「よろしいのですか、陛下？」

「何が？」

リグジ翁が、立ち上がった皇帝に声をかける。皇帝は何時もの表情だが、この翁は先代、先々代と皇帝に使えてきたここ二百年の崑崙の生き字引だ。

そんな彼だからこそ、色々^{いろい}と踏まえた上でそう声をかけたのだろう。

「大丈夫だよ、リグジ。それに私じゃあもう、これは超えられないし」

何時もとちょうど、少し違うような視線をチラシに注ぐ。そこにどんな感情が込められていたのかは、皇帝本人以外知りようがない。そして皇帝は玉座に戻る。それが彼女の意思を表していることを、臣下達は汲みとった。

そしてそこは皇子と執務補佐官が一人いないだけの、いつもの瑠樺居庵に戻っていた。

「あ。依頼料持たせるの忘れた」

その二。 Evil Villain

「ふふはーっはっは！！ このバスは怪人スパイダー男が占拠した！」

真夏の陽光に熱せられて陽炎を上げるアスファルト。その上を走る、キャラクターのついたファンシーなマイクロバス。

そのCFRP製の天井に大穴を開けて落ちてきた一物体（存在）は声高らかにそう告げた。

三対の巨大な肢を広げ、同じ数の単眼を見開いている。

全身の黒と黄の斑の毛を逆立てて、縦に開く大きな口からは緑色の粘液を滴らせている。

怪人スパイダー男。

某赤と青のハリウッド製蜘蛛男とは似ても似つかない風貌の生物が立っていた。

「貴様ら館鬘学園付属幼稚園の園児は、我々秘密結社『イービルビレン』の実験台となるのだ！」

必要以上に説明的なセリフを言うのはデフォルトなのか。しわがれた声がポリウムを増して、更に高らかにゲラゲラと笑う。

「さあ、進路を我等が秘密基地に向ける！ 戦闘員！」
「イーッ！」

何処からともなく全身タイトの戦闘員が現れる。背も体格もちぐは

ぐだが、一様に髑髏をモチーフにした仮面をしていて、発する言葉は甲高い「イーッ！」である。

その内の一人が地図を片手に運転手に変な武器を突きつける。静止に入ろうと立ち上がったのは引率の職員だろうか。

その前にも立ちほだかり、残った一人がスパイダー男と一緒に生徒たちを物色する。

「ぐえっへっへ、一体誰にしようかなああ？」

睨めつけるように生徒たちを見て、その顔つきや体格を値踏みする。六つの単眼が独立して動き、可視光線、赤外線、磁場、短長波、音波を感知していく。

「そうだなあ……お前かあ？ それともお前かなあ？」

グルリグルリと人間の関節では不可能な動きで首を動かす。

その様子に、子供たちが悲鳴を上げる。目尻に涙を浮かべ、スパイダー男から少しでも離れようとする。

日曜の朝に見慣れているとは言っても、実際のそれを目の前にすればやはり違う。リアルな質感と、獣臭にも似た匂い。そして隠しよ^{オーラ}うのない気配。それは幼稚園児にとって過剰すぎるものだった。

そして、一人の女子が限界に達し泣き出そうとした、その時。

「……………そこまでだ、怪人スパイダー男！！」「……………」

バスの進行方向上に、五人の男女が現れた。そろいのスカジャンを羽織り、見るからに大きい腕時計をつけている。

清潔感のある熱血漢^{レッド}、長髪のクールガイ^{ブルー}、明るい茶髪の少女^{イエロー}、知的な青年^{グリーン}、そして清楚な女の子^{ピンク}。

そのそれぞれが、同じポーズで腕時計を手で掴む。

『『『『『変身！！！！！！』』』』』

きらびやかなライトエフェクトを発し、その身体が見えなくなる。何故か何処からか、熱いBGMが流れた。

「うわあ！」

「イーツ！」

フラッシュに目の蒙んだ運転手がハンドル操作をしくじる。とつさにその横に立っていた戦闘員がブレーキを踏みハンドルを切る。急制動でバランスが崩れ、重心の高い車体が横転しかける。いくら固く丈夫なCFRP製の車体でも、中に乗っているのは人間だ。このままでは怪我人が出てしまう。

だが

「なんとおおおおお！」

黒い腕を窓を割って外に伸ばし、鋼鉄の数十倍の強度を持つ生体ワイヤーを射出するスパイダー男。それを怪人故の臂力で引き寄せ車体が元に戻る。

「全員無事か!？」

「「「イーツ!」「」」

園児も含めて戦闘員各々がその人数と様子を確認すると、スパイダー男と戦闘員たちはバスから飛び出す。

と、その眼前には。

『『『殺戮戦隊・ジエノサイダー!!!!!!!!!!』』』』

先ほどの男女が、五色イロとりどりのスーツで立っていた。かなり物騒な名前を叫びながら。

西暦が二千代になった年。皇暦だと……知らない。

新世紀になったからって何かが変わるわけでもない。銀色の空飛ぶ車も、月面都市も、テレビ電話もない。

携帯電話は……まあ、便利だけれど。

しかしながら、実際にあるのは、あいも変わらず即物的な、庶民的な暮らしかだ。

こうしている間も経済は周り、消費と被消費の関係は、絶えない歯車として回り続けている。

つまり、先立つモノがなければ食っていけない。金の切れ目は縁と命の切れ目。

でも、だからといって。

仕事とは言え。

一生体素子を貼りつけまくっ（コスプレし）てバスジャックはない

でしょう。

怪人スパイダー男ことイービルビレン怪人部門の新卒社員小津野和麻は、^{ずま}そう思いながら五色刷りの殺戮戦隊に立ち向かっていった。^{おずのか}

日が沈んで、もう何時間かが経った頃。

環太平洋超速七号線の高架下。築四十二年の古びれた四階建てのビル。煉瓦敷の壁はその半分以上を蔦が覆い、ところどころにヒビ割れも生じている。

そのビルの地下一階。シャッターが閉じられた奥には、建築基準法をガン無視してフロア全体がブチ抜かれた空間があった。

とはいっても、広くは感じられない。壁にはロッカーが居並んでいる。それに加えて、流線型でスマートなシルエットのモノや武骨で戦車の一部と言われても違和感のないモノ、そしてガラクタにしか見えないモノ。そんな用途と意味の分からないモノがところ狭しと散らかっているからだ。

そんな部屋のちょうど真ん中。新聞紙を広げた上に怪人スパイダー男は立っていた。

「おうふうえへっ！肺に入れぶほっ！」

顔中どころか、体中を煤に塗れさせて。

脚の半分を失い、胴体の一部が炭化している。単眼のうち一つには、大きな破片が突き刺さっていた。

ジェノサイダーの最終兵器「ABCバスター」を這々の体でしのぎ、スパイダー男は咳き込む。息を落ち着かせて、片手に持った一本の注射器を首筋に突き刺した。

中に入った乳清の様な色の酵素液を一気に押し込むと、ピリリとした痛みと共に嫌な汗が吹き出す。パキパキという

音とともに、脚や胴体といった生体素子とその一体感をなくして剥がれ落ちる。

「あー……きつつ」

関節をコキコキと鳴らして、傷と筋肉の目立つ身体を慣らす。この仕事は身体が資本。健康と体力にはかなりの自信がある。怪人となれば、一回の出動でフルマラソンを数本ぶっ続けるぐらいの体力を使う。一日数回の出動と事務仕事をこなすのだから、一端の怪人としてこれぐらいは平気なのだ。

だが、だからといってABC、つまりは核、アトミックバイオ生物、ケミカル化学の合わせ技を食らって平気かといわれればNOである。ちよつと違うだけで、怪人スパイダー男といっても、人間ではあるのだから。

「痛え……しかもめんどい……」

スッポつと、最後に残った顔の部分を脱ぐ。そこだけは生体素子ではなく、機械製なのだ。センサー素子や生体リンク用のインターフェイスの詰まった、博士ドク謹製のマスク。それを片手で片手で剥ぎ取った。

その下から覗くのは、いたずら小僧がそのまんま大人になったような顔つきの青年だった。

太い眉は意志の強さを感じさせて、体育会系の雰囲気によく似合っていた。

マスクを脇に挟み、粘膜だらけの身体をタオルで拭きつつ慣れた手つきでサッサと新聞紙をまとめ上げていく。

染みて新聞紙が破れる前にそれを部屋の隅のゴミ箱に投げ込む。

「いや、小津野さんはまだ怪人だから楽じゃないっすか？俺らみたいな戦闘員はきつついんすよ？」

周りで着替える戦闘員たちがそう声をかける。確かに人間であつても『怪人』なわけであるから一般人のアルバイトである彼ら『戦闘員』に比べて頑丈ではある。とはいっても、限度はある。

それに比べて彼ら戦闘員は、危なくなつたら自動的に基地まで転送される。なぜこれをよりハイコストな怪人に使わないのか、といわれれば、その辺は内の者の経済事情を鑑みてのことだからというほかない。彼らは戦闘員で、^{アルバイト}保険加入は任意だから入って無い者もいる。だが、怪人なら正社員で全員保険加入済み。しかもずっと頑丈だから、大丈夫だろうということだ。

正義の味方の一撃ぐらい、当たつたつて死にはしない。というのは社長の談。怪人以上に、いや、下手をすると正義の味方に殴られても平気なんじゃないかって言うあんたを基準にすんな。

「いや、お前ら逃げれんじゃん？俺ら逃げれ無いじゃん？」

「そのへんは給料の違いっすよ。俺らの倍はもらつてんじゃないっすか？」

「生活費が違つたろうが……」

「そのへん大変っすよね」

「しかも今月は保険の更新と車検もあるからな……うう」

怪人はその代謝量から生活費もかかる。その辺は、仕方ないというほかない。生きていくために必要な栄養素に特殊なものがある怪人もいるわけだからまだ彼は楽な方だが、それでも一日の摂取カロリー量は常人の一週間分に近い。

出勤保険も一回ごとの更新が必要だし、それらを差し引くと自由に使える金額など戦闘員アルバイトとそう変わらない。

これで正義の味方ヒーローならば国や自治体、後援会からの保証や手当てが出るのだが……

「社長に行ってみたら良いんじゃないっすか？ 聞き入れてもらえるかは、まあ、無理っばいっすけど。じゃあ、おつかれっす」

「まったく聞いてもらえない様子しか想像できない……まあ、おつかれー」

出勤前に予め書き上げた報告書と決済書、そしてマスクの予想外の破損についての始末書を持って。

和麻は戦闘員バイトの後を追うように更衣室兼格納庫を後にした。

髪がまだ半乾きだから、それともこの後社長に報告しなければなら
ないからか。

どちらかか、それとも両方かは分からないが、初夏を迎えようとしている割に気温を寒く感じた和麻だった。

「俺、正義の味方ヒーローになりたくてここに入ったのになあ……はあ」

出てきたドアの鍵を閉める。彼が過ぎ去った後のドア。そこに填っ

たくすんだ擦りガラスには、消しきれていない「ヒーローズプロダクション」の文字があった。

ビルの四階は、事務所となっている。

殺風景で、簡素かつ機能的……というよりも「物」のとにかく無い。キーボードと受話器の置いてある事務机が一つと、デスクトップパソコンの本体が幾つか並んで詰まった資料用の棚が一つ。そして大きく重そうで、使用者も含めて四階の床面積の四分の一を占めるコンチネンタルデスクが一つ。それしか無い。

とはいえ、殺風景な雰囲気は無い。それは、あまりに強烈な個性を持つ社長と事務員の二人がいるからだろう。

そのうちの一人は、コンチネンタルデスクに水虫を患った足を投げ出し、無段階リクライニングの椅子に体重を預けて睡眠をとっている。長い下まつ毛の生えた瞼はキツリと閉じられていて、無精髭の生えた口元にはヨダレの後が。規則的に低いイビキをかいている。

その男こそ、英雄派遣株式会社「ヒーローズプロダクション」改め、怪人派遣株式結社「イービルビレン」社長の御統真澄だった。

その机の前に和麻は整立し、報告書を読み上げていた。

淡々と、面倒事を起こさないように、なるべく表情を固めて。

「……そして前方約二十二メートルの位置からABCバスター^{ひんちゅうわ}の発

射を確認しました。そこでマイクロバスごとワイヤーで懸架し高架下に退避。そこから下水道を伝って帰社しました。経過は以上で、損害報告等は出勤報告書に記載しています」

「それで外れたその必殺技が隣の国道バイパスに大穴を開けて、事件終了後の今に至るまで十キロの渋滞を引き起こしている、と？」

「はい。黒船さんや秋津さんがいたならどうにでもなったのでしようが、流石に『握力だより』の俺には対抗手段が無いので」

「分かりました。今回は道路の修繕費等は依頼者側ヒーローの支払う契約になっていますが、以降はできるだけ被害を減らすようにお願いします。できるだけ」

「はい、できるだけ」

受け答えをしているのは、女性の声。冷たく鋭く、何処か機械的な声だ。真澄はいまだに大イビキをかいている。よって彼の声ではない。それは事務机に向かった女性のものだった。

スーツ姿の彼女はモニターも無い虚空を見つめて、小さい手で一切の迷いもなくキーボードを打ち込んでいる。

その横顔は流麗で、黒髪だがフランス人形のようにも見えた。

それは予算管理から発注その他までを一人でこなすイービルビレンの敏腕プロデューサー。

保志野志保その人だった。

「生体素子は使い捨てだからいいとして、マスクの眼球センサーアイボールはメーカー修理ですね。そのぶんの始末書は本日中をお願いします」

「ほ、本日中ですか？ いやいやいやいや、だって今日もう九時回ってるんですよ？ 今からでも終電間に合わな」

「それがなにか何か？」

「いや、一昨日からずっと社泊じゃないですか！ さすがにそろそろ帰った」

「私と社長は毎日社泊ですが？」

「いや、志保さ」

「『保志野さん』です」

「……………保志野さんと社長は住所ここじゃないですか！」

「ええ。で、それが何か？」

平行線ではなく、絶壁。もう取り付く島どころかカルネアデスの板すら無い。有無を言わせない脅迫じみた口調で押さえつけている。洗濯物も溜まってきたし、掃除も洗車もしたいというのに。犬とか飼ってなくてよかった。会社の応募事項に「扶養者やペットの無い方」と書いてあったのはそういう事が。

「とにかく、出してもらえないと帰しませんから。では早めにお願
いします」

渡されたのはもう何枚かいたかも分からない、A4の用紙。そして数本パックー〇〇円で売られているボールペンと修正液。それを渡される。

これを九割以上かなり綺麗な字でうめなくては受け取ってもらえない。

「はあ……………」

隅に立てられたパイプ椅子をとって、コンチネンタルデスクの横につける。元々座る側でないから居心地は悪いが、ここで書けないとなるともう床か壁に押し付けて書くしか無い。カリカリ、カタカタ、グウグウと。街の音以外には静寂と言っても差し支えない、そんな中で。

落雷のような音とともに、まるで超局地的直下型地震のように、事務所が大きく揺れた。

その三。シュウイ状態。

「なあ、志保」

「なんですか、社長？」

「うちの社屋は確か四階建てだったと思うんだが？」

「はい、間違いなく四階建てでした」

「建て替えかリフォームの予定、もしくは記録は？」

「ありません」

「じゃあ、なんでビアガーデンよろしくオーフントップ宵空天井なんだ？」

そう、つい数分前までは。つい先程まで天井として雨風を凌ぐ役割を果たしていた煉瓦や梁が、無残に瓦礫とかしてる。

コンチネンタルデスクの上と、その回りにはその瓦礫が散乱していた。

もちろん、室内にいた三人の上にも。

三人のうちの二人が、会話をしている。

片方は先と同じ、凜とした鈴のような声。淡々と語る、保志野志保だ。相変わらずキーボードを叩き、虚空に視線を置いている。引つ詰めた髪の上に瓦礫が降り注いでいるが、気にした様子はない。

もう一方は和麻よりも年上の、落ち着いた声だ。声質同様にこの状況下でも落ち着いているようで、口調には常と変わった様子がない。ただ、非常にくぐもっているのは、その発している人物の顔面の上に大きな煉瓦片が落ちているからだろう。

社長、御統真澄。この騒ぎになってようやく、彼は目を覚ました。と入っても体制はそのまんま。あいも変わらず厚顔不遜に座って天

を仰ぐ用に顔を上に向けている。とはいえ、傍から見ても彼には煉瓦しか見えていないことは明白なのだ。
真澄が大きく息を吸い込む。そして

「ぶるあああああ！」

桁外れの肺活量と声圧。それで瓦礫が浮き上がり、砕け散る。顔面を手で払って、起き上がると、彼は改めて、落ちてきた瓦礫とその中に垣間見える気絶した三人に目を向けた。

一人はスパイダー男もとい正社員。一人はやたらと体のラインが目立つ女。そして最後の一人は、ボンボンか？　と思わせるような霧困気の男児。

三人とも無事のような。怪人である正社員はもちろん、他の二人もカスリ傷などは絶えないが、見たところ呼吸もしているっし、出血もない。

さて、状況はと言うと。後述した二人が正社員の上に屋根を突き破り落下した。

文にしてしまえばこの一行で意味が通る事態だが、そう簡単ではない。問題なのは、この二人が明らかに『異世界人』であるということだ。

くろぐろとした金属光沢を持つ神の人間が自然にこの地球にいてたまるか。

「起こして話を聞きましょうか？」

「アンチパベル翻訳機点けて……っ。ああ、起こせ。でもあんま過激にすんなよ？　賠償請求ぺんしょうできる程度に生きた状態で頼む」

「御意に」

物騒な言葉だが、言って置かなければよくて半殺しにされかねない。了解の意を伝え、指を動かすのをやめると彼女は立ち上がった。

年上であろう落下者、女性の方に近づく。スリッパの小さな足先を仰向けの体の下に差し込み、蹴り上げる容量でうつ伏せにする。そして首に手をかけて。力を込めて。

「えい」

ボキン！

「ほっわっ！」

激痛を与える形で、蘇生した。

あ…ありのまま、今起こった話を話すぜ！ 『バカ皇子とともに異世界に送られたかと思ったら、いつの間にか激痛で起こされたっ！』
な…何を言ってるのか分からないと思うけれど、私も何をされたのかわからなかった…頭がどうにかなりそうだった…
打撃とかとか、関節技とか。^{サブミッション}そんなチャチなもんじゃあ断じて無い…
…もつと恐ろしく痛そうなものの片鱗を味わった…

いや違う。味わ…っている！！現在進行形！

小さな手で痛いし、爪も食い込んでいるし、何より力が強い。お、折れる！殺される！？殺されるよ、間違いなく！

「って、痛いっつーに！」

「！？」

だがシュウイとて、筋力には自信がある。庶民育ちで、幼い頃から男の子に混じって野良仕事を手伝ってきたのは伊達じゃない。

エビ反る体制で拘束されたその状態から、床を蹴りつける。上に跨った少女のバランスが崩れた。

それを見逃すハズがない。瑠樺居庵の要職では最年少というのは伊達じゃない。一応の格闘術はみに付いているのだから。

髪をまとめている簪を抜き取る。瑠樺居庵への就職が決まった時に、父が行商の旅人から買ってきてくれたものだ。

こんなことに使って申し訳なく思うが、可愛い娘が痛めつけられている訳だから許してくださいお父さん！これは正当防衛なんです！瑠璃色に金属光沢のある長い髪が散らばる。その合間を、銀色の簪が走る。簪が志保の喉元をめがけて突き刺さ……

「えい」

らなかった。それどころか気の抜けた声とともに、金属髭繊維でできた簪はいともたやすくへし折られる。

何時の間に変わって入ったのは、御統真澄。

その開いた片手が拳を握ったかと思うと、シュウイはへし折れた簪の後を追って、再び床に引倒されたのだった。

気がつけば、二人揃って闇夜の空。空高いところには星がなく、自分たちが自由落下に従って引きつけられる方に煌々とした光が灯っている。

眼下に広がるのは、無機質ながら活気の満ちた、混沌^{カオス}の街。月が一

つかない。大氣中に魔力を感じない。

間違いない。ここは、異世界だ。栄夏でも、瑠樺居庵でもない。何処が変わった世界なのだ。

だが、それは今、さして問題ではない。未知の世界だから何がどうして危機に迫るかということが分からない、そんな怖さはもちろんある。

だがそれ以上に。

「ぎゃあああああああ！！！」

決して小さくはない街が一望できるぐらいの高度からのフリーフォール。その現状が一番の問題だった。

山のような高さの建築物に、巨大な橋。その上を走る大きな変な四角い物体。それらを視界に捉えながら、高度をどんどん下げていく。そして、以前の世界でも馴染みの赤い土の色をした煉瓦が目の前に迫ってきて……

「ああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

その辺りまで思い出したあたりで、ユーリはガバリと飛び起きた。ひどい寝汗だ。

普段使わない腹筋を酷使しての急制動で状態を起こしたためか、それとも煉瓦を突き破って落ちてきたせいかな。

妙に全身が痛い。痛い程度で住んでよかったとは思わないのが、皇族^{そく}ゆえの皇帝学か。

頭に載せられた濡れタオルが、水の吸着力を超えた重力に惹かれて

ポトリと落ちる。開けた視界。窓らしきところからの奥外の様子はまさに夜の暗さなのだが、室内は異常に明るい。

彼の寝かされているソファからは、ちょうど部屋の反対側。中央の瓦礫を挟んだその先の、大きな机。

そこには見知った顔と、見知らぬ二人が机上の書類を見ながら話していた。

シュウイがいたことで、多少なりとも気が緩む。ユーリにとって彼女は、何気に頼りになる存在だ。性格の粗さはともかくとしても、能力は非常に優秀なのだから。

もっともその見知った顔が、真っ青で冷や汗を浮かべていることにまでは気が回らなかったが。

「で、公王国軍とか帝国軍とかはともかくとして、とどのつまり、金がない、と？」

「は、はい。いきなりここに転送されてしまったので……」

シュウイが、目の前に立ち腕を組む真澄に向かってそう答える。喝を入れられて目覚めさせられた直後に拘束されて、弁償を命じられた。

そこで彼女はこれまでの経緯と、その他身分等を説明していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8821x/>

Wanna be the HEROES!! 世界を救うだけの簡単なお仕事です

2011年11月17日20時20分発行